

2004.5 Vol.3

岐阜県現代陶芸美術館  
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5  
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101  
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



## ■新収蔵品紹介

# 十一代三輪休雪「萩菱形水指」 三輪休「萩面トリ花入」

### 休雪と鉄腕アトム

2003年4月7日、萩市において、萩焼の名家三輪家の十二代休雪襲名が記者発表された。伝統の陶家において、きわめて斬新な独自の世界を展開してきた三輪龍作氏が休雪を襲名されたということである。この時さっそく陶磁協会が龍作氏に電話を入れたというが、すると十二代休雪こと龍作氏は、「4月7日、アトムの誕生日に発表しました」と話されたという。たしかに2003年4月7日は、科学省長官天馬博士が、交通事故で死んだひとり息子飛雄（とびお）にそっくりのロボットを、科学省の総力を結集して完成させた日、つまりアトムの誕生日というのが手塚治虫の設定であった。まことに龍作氏らしい物言いというほかはない。いきなり余談から始めてしまったようだが、ところで、本誌で取り上げる新収蔵の2点は、龍作氏の父君であり人間国宝最高齢（かぞえ95歳）の十一代休雪の作品である。龍作氏襲名の席上、十一代は、休雪改め、壽雪と号するということが表明されたのである。

### 瞳目すべき力

当館は十一代休雪の「萩焼作品」と名付けられた鬼萩割高台茶碗を所蔵しており、かねてからさらに水指と花入を収集したいと考えていた。「萩菱形水指」は、十一代休雪が壽雪と号する直前の、つまり十一代休雪

としての最後の窯で焼かれたもので、久方ぶりである所謂「角もの」とされる見事な作例である。是非本作品を収蔵したいと考えていた折、壽雪ご本人から当館館長に電話があり、「あの茶碗（「萩焼作品」）にとっても、この水指と共にあるのが本懐じゃろう」として、何とご寄贈を申し出てくださったのである。すでに、十一代が休雪襲名以前「休」の名を用いていた頃の「角もの」の最初期作である「萩面トリ花入」ご寄贈のお話をいただいたところであり、私どもにとって、望外の喜びであった。

その所謂十一代の「角もの」とは、土の塊を日本刀で切断、叩くなどして成形し、内部を削り抜くというものだが、通常の刀では粘土は刀に貼り着き思うように切れるものではないという。その日本刀を拝見すると、それは鉄錆（さび）で覆われている、まさに錆刀であった。実は土はこの錆刀ではじめて切断可能であり、しかもなお渾身の気合いが必要だということである。おそらく現役陶芸家最高齢にして、本作例に見るこの計り知れぬ力には改めて驚かされたものである。

また本年度初頭に開催された「十一代休雪改め三輪壽雪白心展」では、冒頭述べたように休雪の名を譲られてひと呼吸おくどころか、いよいよ止まることを知らず、「鬼萩花冠高台茶碗」などはじめなお進境を拓かれるに至っては瞳目するばかりというほかはない。

〈学芸部長 渡部誠一〉



十一代 三輪休雪〈萩菱形水指〉 岐阜県現代陶芸美術館蔵  
撮影：齋城卓

## ■テーマ展示

# モダンライフを彩る器—森正洋のデザイン—

2004年6月8日|火|—10月3日|日|

液漏れしないしょうゆさしとして広く知られている《G型しょうゆさし》。第1回のグッドデザイン賞に選定されたこのしょうゆさしは、森の代表作品のひとつです。

1927年、佐賀県塩田町に生まれた森正洋は、多摩造形芸術専門学校（現在の多摩美術大学）工芸図案科を卒業後、出版社に勤務。美術スライド制作などの取材を重ねる中で、社会を知る一方、焼き物制作に対する思いを強くしました。そして、長崎県窯業指導所デザイン室に勤務したのち、白山陶器に入社し、そのデザインを一手に引き受けるようになります。「日常の生活で使う器を考え、形を創り、工場で生産することにより、多くの人々とともに共有し、生活することに、デザインの喜びを感じる」という森の一貫したデザインポリシーにもあらわれているように、優れたデザイン性はもちろんのこと、大量生産が可能で、廉価で入手しやすいというプロダクトデザインの基本精神を常に心がけて制作してきたことが、「白山陶器に森正洋あり」と知らしめる結果に結び付いたと考えられるでしょう。また、優れたデザインとは、用と美の調和だけではなく、食文化の変遷などの時代性を反映させることが必要です。森は、飽食の時代には酒などの嗜好品に対する需

要が高まるので、《ロックカップ》という酒の器を作ったと語ります。

しかし、森は、プロダクトデザインを真摯に受け止めた「陶磁器デザイナー」であることを忘れてはいけません。これは、彼がデザイン画だけではなく、プロトタイプの制作過程を一人でこなすことからもうかがえます。土味とよばれるものを表面に押し出した器が多く存在し使用されてきたなかで、森がデザインした陶磁器は、シンプルで飽きのこないデザインとともに機能性を兼ね備えた器として、評価されています。現在では110点以上もの作品が、グッドデザイン賞、いわゆるGマーク選定を受けています。

身の回りのものをデザインするとき、優れたデザイン性はもちろんのこと、大量生産が可能で、廉価で入手しやすいことが使用を目的とした購入の際の基本となります。森はその理念を崩すことなくそして自分が使用したいものを念頭におき、陶磁器デザインを続けてきました。そんな森のデザインした器は、現在でも老若男女を問わず人気を博し、スタイリッシュな日常を演出しています。陶磁器デザインによって表現されるハイセンスな生活を提案する展覧会です。

（学芸員 岩井美恵子）

会期 2004年6月8日（火）—10月3日（日）  
 休館日 毎週月曜日（ただし、月曜日が休日の場合はその翌日）  
 会場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーⅡ 展示室A  
 開館時間 午前10時—午後6時（入館は午後5時30分まで）

観覧料 個人 一般320円(260円)、大学生210円(160円)、高校生以下は無料  
 ※（ ）内は20名以上の団体料金  
 ※この料金で、ギャラリーⅡにて開催中の他の常設展もご覧いただけます。  
 ※愛知万博前売り券及び花フェスタ2005前売り券をお持ちの方は団体料金で入館できます。

関連企画 ギャラリートーク「森正洋—自分史を語る77年—陶磁器デザインと文化—」  
 6月12日（土）午後2時—4時  
 森正洋氏を展覧会場に迎え、生い立ちから現在に至るまで、時代の食文化の移り変わりとともにご自身の思い出についてお話しいただきます。



《G型しょうゆさし》デザイン 1958年 岐阜県現代陶芸美術館蔵  
 撮影：齋城卓



《ロックカップ》デザイン 1978年 岐阜県現代陶芸美術館蔵  
 撮影：齋城卓

■ 次回開催展予告

# 表現者 河井寛次郎展

2004年5月28日|金|—8月22日|日|

本展覧会は、これまで民藝運動との関わりのなかで語られることの多かった河井寛次郎（1890—1966）の晩年の強い創作意欲から生み出された作品に注目し、新たな河井寛次郎像を紹介するものです。晩年の自由な境地を示す陶芸作品を中心に、初期や民藝期の代表作、木彫作品、デザインした家具やキセル、書なども併せて展示し、表現者河井寛次郎の到達点を多面的に検証していきます。

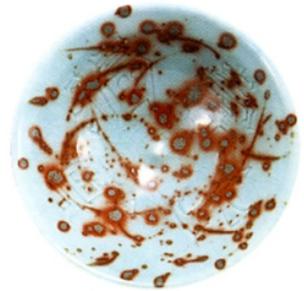
基礎的な技術を徒弟制度のなかではなく、学校や陶磁器試験場で学んだことから、自由に陶芸のスタイルを選ぶことができた寛次郎は、その陶芸家としての活動を中国の古陶磁の研究から出発しています。そして東京高等工業学校とその後勤務した京都市陶磁器試験場で習得した高度なテクニックにより新進作家として評価された時代、また柳宗悦と知り合って、無名の工人が作り出した日用品の簡素で力強い美しさに惹かれた民藝運動の時代といった研鑽の日々を経て、戦後は自らの内面からわき出る感動を思うがまま造形の中に表現しうる、自由な境地に到達しました。

55歳のときに終戦を迎えた寛次郎は、以後何のものにもとらわれることなく、民藝も脱していよいよ独自の表現の世界へ突き進んでいきます。戦時下の窯が焚けない時期、寛次郎の創作への思いは思索と文筆のなかで深く熟成され、戦後にはその思いが一気に解き放たれたかのように、次々と心に湧きあがる造形を作品にしています。

「作陶のうえで土、釉薬、形体、焼成のうちどれが一番大切か」との問いに、寛次郎は「先ず、形体を成すことが一番大切な基本だと考えている」と答えたといえます。まさに晩年の作品は、天衣無縫ともいえる自由な形体感覚から生まれています。その実用を離れた個性的な造形は、今日なお斬新です。これらの形を彩る加飾技法も幅広く、独自の釉薬のほか、練上、貼文、筒描と多様で、また泥刷毛目や打薬などの技法のように自身でも編み出しています。打薬では柄杓ですくった赤・黒・緑の色薬を器表に打ちつけており、アクションペインティングさながらの計算しつくせない偶然の美しさと、ほとぼしするような寛次郎の表現への思いが打ちつけられているかのようです。石膏型を使った成形も得意としており、当館所蔵の「花絵扁壺」も親しかった井上靖氏に譲られた作品と同一の型から作られたようです。これらは1957年のミラノ・トリエンナーレ国際陶芸展でグランプリを受賞した草花文扁壺（1939年京都国立近代美術館蔵）やその姉妹品と同じ型を用いています。戦前戦後と同じ型を用いていることから、お気に入りの形だったといえるようです。寛次郎のこのような創作意欲は、陶芸の枠におさまりきらず、家具のデザインや木彫、陶彫の制作、さらには文筆や書の世界にまで及んでいます。木彫も1937年に自宅を建て



三彩昆虫文箱 1922年  
河井寛次郎記念館



青白磁紅斑山海寿字鉢 1921年頃  
河井寛次郎記念館



練上陶碗 1956年 個人蔵



竹製椅子 1940—41年  
河井寛次郎記念館



三色打薬扁壺 1963年 河井寛次郎記念館



褐釉筒描彩釉花文扁壺 1954年  
河井寛次郎記念館



陶彫像(鳥)1960年  
河井寛次郎記念館



呉須泥刷毛目扁壺 1957年  
河井寛次郎記念館

かえた際の余材で猫や童女を作ったことに始まりますが、本格的に取り組んだのは1950年以降、寛次郎が60歳の頃のことです。粘土でつくった原型に基づいて京仏師の松下武雄（宗琳）が下彫りし、最後を自らが仕上げていました。1960年頃からは、さらにこれらの木彫像を原型に陶彫制作へと創作意欲は展開しています。晩年にあっても新たな分野に挑戦し続け、常に新しい表現に挑み、自由な造形世界を拓いた表現者寛次郎のその作行の広さは実に型破りで驚異的です。

フランスの著名な文化人アンドレ・マルローは寛次郎が晩年に制作した呉須泥刷毛目鉢の激しい作風を見て「ペーターヴェン」と叫び、絶賛したと言います。近代の陶芸家の中でも、最も自己を自由に表現した作家として、河井寛次郎はまさに「表現者」と呼ぶにふさわしいかもしれません。

〈学芸員 佐野素子〉

会 期 2004年5月28日（金）-8月22日（日）  
休館日 毎週月曜日（ただし、月曜日が休日の場合はその翌日）  
会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI  
主催：岐阜県現代陶芸美術館 中日新聞社 協力：河井寛次郎記念館 企画協力：浅野研究所  
観覧料 個人 一般 800円、大学生 600円、小中高生 400円  
団体（20名以上） 一般 700円、大学生 500円、小中高生 300円

関連企画 <講演会> 場所 岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルーム  
06月19日（土）午後2時～  
「表現者 河井寛次郎—晩年の飛翔—」講師：矢島新（渋谷区立松濤美術館主任学芸員）  
08月1日（日）午後2時～「私と河井寛次郎」講師：十二代三輪休雪（陶芸家）  
<ギャラリートーク>  
会期中、毎週日曜日の午後2時より、当館学芸員による作品解説を行います。



花絵扁壺 1957年頃 岐阜県現代陶芸美術館 撮影：斎城卓



呉須泥刷毛目扁壺 1957年 河井寛次郎記念館

## 教育普及活動報告

# 岐阜県現代陶芸美術館のオリジナルソフト



岐阜県現代陶芸美術館に設置されているデジタルライブラリーでは、陶磁器文化に関する様々な情報を公開しています。本事業は来館者に展示とは異なる映像という手法で収蔵品を紹介し、作品の理解を助け、多様な陶芸文化への手引きとなることを目的としています。

開館前の平成13年度からオリジナルソフト制作を実施しており、その内容は「人と作品」「技と素材」「展覧会・イベント」「特別企画」のテーマにより構成されています。

### ①「人と作品」

当館の収蔵作家へのインタビューを中心に構成しています。生い立ち、制作のきっかけなど、作家本人が自らを振り返り、自分史を語ったものです。幼少時の写真や当時の状況資料なども提供されており、作品のみならず、制作者を深く理解することができます。

収録作家:「荒木高子」「加藤卓男」「徳田八十吉」「富本憲吉」「藤平伸」「三輪休雪」「森正洋」「森野泰明」「柳原睦夫」「山田光」「バーナード・リーチ」

\*日英のバイリンガル制作

### ②「技と素材」

上絵付研究が前身である現在の多治見市陶磁器意匠研究所に残されていた映像資料です。優れた技術者が高齢になりつつあり、美濃を支えてきた職人の手業を記録に残しておきたいとの目的で制作されました。(1982年制作)

職人達へのインタビューを試みており、その技術のみならず、製作にかかわる職人たちの生の声を聞くことができます。現在失われた技術も少なくないとされ、貴重な記録となっています。フィルムの劣化を防ぐため、当館においてデジタル化したことで広く公開できるようになりました。

### ③「展覧会・イベント」

2002年10月12日に当館の開館記念展としてスタートした「現代陶芸の100年」の様子をご覧いただけます。また「デザインとアートの挑戦」など当館で開催された企画展、その他2001年に韓国・利川を中心に開催された「大韓民国世界陶磁器エキスポ2001」など、国際的な陶芸展もご覧いただけます。

\*日英のバイリンガルで制作

### ④「特別企画」

当館の開館記念展Ⅱである「ロシア・アヴァンギャルドの陶芸」展で試まれた「ロドチェンコ・ルーム・プロジェクト」の記録をご覧いただけます。

<学芸員 高満律子>

## 展覧会スケジュール

	2004.5	7	9	11	2005.1	3
ギャラリー I	カタチが切る —日本の現代陶芸— 4月3日—5月16日	表現者 河井寛次郎 5月28日—8月22日	ミノ・セラミックス・ナウ2004 9月4日—12月5日		うつわとウツワのかたらい 12月21日—3月27日	
ギャラリー II		モダンライフを彩る器—森正洋のデザイン— 6月8日—10月3日		イタリアの現代陶芸 10月5日—3月4日		
		世界の名窯—ジャポニズムとアールヌーヴォーから— 6月15日—10月11日		世界のモダンデザイン—白いうつわにみるかたち— 10月13日—3月4日		
		スペインの現代陶芸 6月22日—10月17日		気になるカタチ—日本陶芸の新動向— 10月19日—1月16日	思春期のカタチ 1月19日—3月4日	

## ギャラリー II 常設展示案内

### 展示室 A

#### モダンライフを彩る器 —森正洋のデザイン—

2004年6月8日(火)—10月3日(日)

陶磁器デザインの第一人者、森正洋のデザインした器（現在では110点以上もの作品がグッドデザイン賞、いわゆるGマーク選定を受けています）を陳列し、その功績を振り返ります。期間中の6月12日には、作家本人によるギャラリートークを開催します。



### 展示室 B

#### 世界の名窯 —ジャポニズムとアール・ヌーヴォーから—

2004年6月15日(火)—10月11日(月)

「日本趣味」と訳されるジャポニズムと、「新芸術」の意味のアール・ヌーヴォーのデザインを取り入れた産業陶磁器を展示し、デザイン史のなかでのやきものをご覧いただけます。



### 展示室 C

#### スペインの現代陶芸

2004年6月22日(火)—10月17日(日)

地域固有の言葉、伝統、文化が並存するスペインは、極めて複雑で多彩な文化的土壌を有する国です。今展では、現代を生きる人間の存在を問いかける4人の作家の作品を展示します。



1. 森正洋〈G型しょうゆさし〉
2. 森正洋〈ロックカップ〉×A
3. フェリックス・ブラックモン〈《セルヴィス・ルソー》の三つ脚付き鉢〉×B
4. セーブルくひなぎく文コーヒースセット〉×B
5. マリア・ポフィルく無題〉×D
6. マリサ・エロンく撞鉢と閉じた陶器〉×D

## 収蔵品紹介

荒川豊蔵 (ARAKAWA Toyozo)  
志野水指  
昭和十年代半ば頃 h17.0×22.0×22.0

志野は、日本陶磁史上、特筆すべき二つの性格をもつ焼物であった。そのひとつは、長石釉を用いて日本で初めて作られた白い焼物であるということである。もうひとつは、やはり透明な長石釉によって、下絵付が可能になったという点である。それまでは、中国白磁を写すために、灰釉が用いられており、中国の青花（染付）を写すために、印花や彫りなどを素地に施すはなかったのである。こうして志野は上質の中国陶磁の写しをもたらすことになるが、さらに重要なのは、志野によって日本独自の、ことに茶陶の分野で、さまざまな独自の器種、器形が生み出されたことである。また長石釉のみの無地志野、下絵付による鉄絵を加えた絵志野の他、鼠志野、赤志野、紅志野、練込志野など、文様や施釉薬技法を複合発展させ、意匠、作行とも貪欲に志野の可能性が追求されたのである。

こうした志野などの桃山時代の名品は、昭和の初め頃までは瀬戸焼の一つと考えられていたが、この通説は、昭和5年（1930）の荒川豊蔵の志野陶片の発見によって覆され、志野、瀬戸黒、黄瀬戸、織部などの桃山陶は美濃で焼かれたということが明らかとなり、これが契機となって、古陶磁の技法を解明・再現し、その表現を探究する古陶復興の気運がいよいよ高まることとなったのである。この動向の中から、古陶磁の模倣にとどまらず、伝統を重んじながらも個性的・創造的な表現を追求して、日本陶芸史に大きな足跡を残す陶芸家が少なからず輩出されることになる。荒川豊蔵はその先駆的存在の一人であり、昭和30年（1955）には、志野、瀬戸黒の重要無形文化財技術保持者、いわゆる人間国宝に認定されている。

この志野水指は、豊蔵の初期の頃の努力の成果を伝えるもので、昭和十年代半ば頃の作と伝えられる高橋茂旧蔵のものである。高橋茂は、

信州の素封家の出で、高蔵寺の高倉工業という砥石と耐火煉瓦の焼造会社の社長であり、瀬戸や美濃ものの研究と蒐集で知られるとともに志野茶碗などをものする実作者でもあって、日本陶磁協会の東海支部長を務めたという人物である。豊蔵が高橋と出会ったのは、昭和14年（1939）と記録にあり、この頃豊蔵は、大萱（可児市）の牟田洞に築窯し、桃山志野の復興を目指し貧苦の中にあつたという。高橋は、この窮乏を手助けしようと、自ら豊蔵作品の頒布会発起人になったりしている。豊蔵もまた昭和16年（1941）に、高橋の高蔵寺砥石工場開設を手助けしている。同年、豊蔵の初個展があり、高橋はこの志野水指を、この前後に入手したようである。

本作は、口縁部に双耳をもち、腰部を一段と張り出すという独特の形姿をもち、美濃で焼かれた伊賀風の作例であるいわゆる美濃伊賀を原型とするが、全体の造形、篋造りなどあくまで大胆であり、まさに豊蔵志野に至らんとする初期作の心躍る様を伝えるようである。志野釉は、あくまで淡く紅をにじませるが、緋色は抑制されて、白が勝りやはり初期作の特徴をみせる。背面に石爆ぜがあり、石底部は一部露胎で糸切り条痕が見え、「斗」と浅く施された釘彫りの銘が読める。

下絵は、両側面に網干（あぼし）図が添えられており、群れ飛ぶ鳥が浜千鳥と知られる。志野復興とはいえ、伝承も、書物もなく、唯一陶片

のみを師として、当て所なく、大きな課題に挑んだのである。本作はそうした道程の中で、志野復興の確信を得て、重要な足跡をしるした一作となったものと思われる。

忘れらむ時しのべとぞ浜千鳥行方も知らぬ跡をとどむる(古今和歌集)

〈学芸部長 渡部誠一〉



〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5  
tel. 0572-28-3100 fax. 0572-28-3101  
Email museum.1@cpm-gifu.jp  
URL <http://www.cpm-gifu.jp/museum>  
開館時間  
午前10:00—午後6:00（入館は午後5:30まで）

